

小學作文全書

文學社編纂

二

東 京 圖 書 館				
			七	七
冊	號	架	函	類
				新書門

授法ノ要領ヲ示スモノナリ而シテ教師執鞭教
授スルニ當リテ已ニ第一卷ニ於テ述ベタル如
ク實物若クハ摸品又ハ圖畫ヲ用井ルヲ必要ト
ス即實際授クルニ際シテ教師能ク之ヲ熟視セ
シメ其ノ名稱性質効用等ニ就キテ先^レ生徒ノ知
リ得タルコトハ自語ラシメ或ハ之ヲ誘助シテ
語セシメテ以テ教授センコトヲ要ス其ノ例左
ノ如シ

〔金も石もかたし〕ノ題ヲ授クル例

□符ハ教師ノ問ニシテ△符ハ生徒ノ答ナリ

教師金ト石トノ二品ヲ携へ來テ生徒ヲシテ
能ク觀察セシメテ後問ヒテ曰ク此等ハ何ナ
リヤ△カ子トイシトナリ□幾個ナリヤ△二
個ナリ□二個異ナリヤ△否同ジナリ□如何
ニ同ジキゾ△カ子モイシモカタケレバナリ
□其ノ二物ヲ取リテ衆生徒ニ示シテ問ヒテ
曰ク誰ハ之ヲカ子モイシモカタシト云ヘリ
然リヤ否△皆曰ク然リ□今ノ言ノ如シ然レ
氏是會話ノ體ナリ若シ文章ニ綴ルトキハ如
何ニ改ムベキゾ△カ子モイシモカタシ□然

リ〔數名生徒ヲシテ反覆セシメテ後全級生徒ヲシテ習熟セシム〕□今語リタル如ク文字ニテ書スルコトヲ得ルヤ先金も石もト書スベシ〔某一名ノ生徒ヲシテ來テ黑板ニ書セシム〕△之ヲ書ス〔知ラザレバ教フ〕□然リ〔數名ノ生徒ヲシテ讀ミ且講ゼシメテ以テ全級ニ及ブ〕□黑板ニ書シタルヲ拭ヒ去リテ各自ノ石板ニ諳ニ之ヲ書スルコトヲ習練セシム

漢字交短句

第一

花 <small>はな</small>	幹 <small>みき</small>	本 <small>ほん</small>	石 <small>いし</small>	山 <small>やま</small>
葉 <small>は</small>	枝 <small>えだ</small>	紙 <small>かみ</small>	綿 <small>わた</small>	川 <small>かは</small>
あかき	ふとまき	あつまき	ねもまき	たかまき
花	幹	本	石	山
あをまき	ほろまき	うすまき	かるまき	ふかまき
葉	枝	紙	綿	川

雪ゆき。墨すみ。

しるき雪。くろき墨

第二

字ト。本ほん。

字をかき。本をよむ

棹さそ。櫓ろ。

棹をさ。櫓をこぐ

花はな。月つき。

花をながむ。月をみる

墨すみ。筆ふで。

墨をすり。筆をもつ

獨樂どくらく。凧たこ。

獨樂をまは。凧をあぐ

毬まり。羽子はね。

毬をなげ。羽子をつく

第三

内うち。外そと。

内にいり。外にいづ

机つくえ。椅子いす。

机にむかひ。椅子による

山やま。谷たに。

山にのぼり。谷にくだる

山にのぼり。谷にくだる

春はる。秋あき。

船ふね。車くるま。

池いけ。木き。

犬いぬ。猫ねこ。

鳥からす。鷺さぎ。

春にまな。秋につき。

船にほ。車にあ。

池にうを。木にとり。

第四

犬はつよく。猫はよわ。

鳥はくらく。鷺はしる。

桃もも。梅うめ。

薑しょうが。蜜みつ。

夜よる。晝ひる。

繩なは。絲いと。

見み。聞き。

桃はあま。梅はす。

薑はからく。蜜はあま。

夜はくらく。晝はあま。

繩はふとく。絲はほろ。

第五

見てしり。聞きておほ。

往還ゆきかへる

往ゆきてかへるならぬ。還かへるりてゆきらふ

上下のぼるくだる

上のぼるりてくだるなむ。下くだるりてみる

車馬くるまうま

車くるまにてゆき。馬うまにてかへる

耳目みみめ

耳みみにてき。目めにてみる

鰭翼ひれつばさ

鰭ひれにてかへる。翼つばさにてとぶ

第六

石板石筆せきばんせきひつ

石せき板ばんと石せき筆ひつとはかた

松竹まつたけ

松まつと竹たけとはあを

日月ひつぎ

日ひと月つきとはまる

雪鷺ゆきささぎ

雪ゆきと鷺ささぎとは

船車ふねくるま

船ふねと車くるまとははや

羽毛はねけ

羽はねと毛けとはかる

第七

金かね石いし

金も石もかた

櫻さくら牡丹ぼたん

櫻も牡丹もうつく

水みづ氷こほり

水も氷もつめた

金魚きんぎょ鯛たひ

金魚も鯛もあが

薑しょうが山葵わさび

薑も山葵もから

山やま峯みね

山も峯もたか

第八

瓜うり茄子なす

瓜はあをくして

茄子なす

茄子はくろく

梨なし

梨はあまくして

梅うめ

梅はすく

火ひ水みづ

春はる秋あき

鶴つる雀すずめ

金きん銀ぎん

稻いね田た

菜な畑はた

魚うを水みづ

火はあつくして
水はつめたくして
春はあたかにして
秋はすくしくして
鶴はねほきに
雀はちひさくして

金はまに
銀はるる

第九

稲は田につくり
菜は畑にうゆ
魚は水にをり

獸野けだもの

松山まつやま

梅庭うめには

馬人うまひと

牛荷うしに

鐵瓶湯てつびんゆ

土瓶茶どびんちや

犬夜いぬよ

猫鼠ねこねずみ

池魚いけうを

獸は野にすむ

松は山にしげり

梅は庭にさく

第十

馬は人をのせ

牛は荷をはこぶ

鐵瓶は湯を煮

土瓶は茶をにる

犬は夜をまもり

猫は鼠をとる

第十一

池に魚をかひ

籠かご鳥どり

籠に鳥をかぶ

花瓶はながめ花はな

花瓶に花をいけ

香爐かうろ香かう

香爐に香をたく

頭かしら帽ぼう

頭に帽をかぶ

足あし靴くつ

足に靴をはく

第十二

雙紙さうし字じ

雙紙にて字をならひ

算盤そろばん數かず

算盤にて數をまたふ

洋燈らんぷ夜よ

洋燈にて夜をてら

時計とけい時とき

時計にて時をうる

釣瓶つるべ水みづ

釣瓶にて水をくみ

桶け米こめ

桶にて米をとぐ

第十三

園 <small>の</small> 花 <small>は</small>	家 <small>は</small> 人 <small>ひと</small>	獸 <small>けだまの</small> 毛 <small>け</small>	魚 <small>うを</small> 鱗 <small>ひれ</small>	鳥 <small>とり</small> 羽 <small>はね</small>
---------------------------------------	--	--	---	---

園	家	獸	魚	鳥
には	には	には	には	には
花	人	毛	鱗	羽
あり	あり	あり	あり	あり

池いけ水みづ

池には水あり

第十四

雀 <small>すずめ</small> 鳥 <small>とり</small>	海 <small>かい</small> 棠 <small>だう</small> 花 <small>はな</small>	熊 <small>くま</small> 獸 <small>けだまの</small>	蟻 <small>あり</small> 蟲 <small>むし</small>
--	---	---	---

雀	海棠	熊	蟻
は	は	は	は
ちひさき	うつくしき	つよき	ちひさき
鳥	花	獸	蟲
なり	なり	なり	なり

桃もも。くだもの

桃はあまき菓なり

柳やなぎ。まき木

柳はあまき木なり

本ほん。かみ紙

第十五

本は紙にてつくり

衣きもの。すて絲

衣は絲にてねる

米こめ。ま升す

米は升にてはかり

顔かほ。たらひ鹽

顔は鹽にてあらふ

香におひ。はな鼻

香は鼻にてかき

刀かたな。と砥

刀は砥にてとぐ

姜潭書



小學作文全書卷之二終

作文全書一三三三

明治十六年四月十日版權免許
同十七年十一月一日再版御届
同十七年十一月出版

定價金七錢

編纂兼
出版

文學社

東京本町四丁目十六番地